



~ 4
2197
1



日本書紀



| |
|-------|
| 利 |
| 2.197 |
| 1-2 |

門 第 卷
 2. 197
 之



万世の集大成

い



藤原康氏遺愛之記

明治三十二年四月廿四日
 藤原康氏書

いけいりくもあまになく... 天つ皇神祖^{うみろみぎ}の大御^{おほみ}の...
 ... 石とふるよ湯代^{ゆしろ}の...
 ... 空^{そら}うがよおほ^{おほ}...
 ... 言^{ことば}のあはほく...
 ... 杖^{つゑ}がつ...
 ... 心^{こころ}の...
 ... 古事^{ふること}に目^めを...
 ... 二^{ふた}百^{ひゃく}...
 ... 言^{ことば}いやび...
 ... 心^{こころ}の...

は... 又四可た...
い... 大佛...
大...
清...
ら...
し...
口...
と...
た...
か...
い...
一...

花...
え...
う...
ん...
つ...
そ...
り...
い...
ん...
は...
ら...
と...

う...
の...
は...
ら...

古今の書集を採りて
各載す所を并古来
旧書目録万葉集
それ人の心を採り
て其の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の

らず。旧し津井の哥は古言を和してて其やま。その代の人々百の
かよはれしうも。とて経うるよして。その人なれ。その人なれ。その人なれ。
○~~~~~の歌
集の巻

古今の書集を採りて
各載す所を并古来
旧書目録万葉集
それ人の心を採り
て其の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の

古今の書集を採りて
各載す所を并古来
旧書目録万葉集
それ人の心を採り
て其の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の

此の巻のついで

古今の書集を採りて
各載す所を并古来
旧書目録万葉集
それ人の心を採り
て其の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の

古今の書集を採りて
各載す所を并古来
旧書目録万葉集
それ人の心を採り
て其の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の

古今の書集を採りて

古今の書集を採りて
各載す所を并古来
旧書目録万葉集
それ人の心を採り
て其の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の
一の二の三の
を採りて其の

古事記の音ほり
 仁明天皇幸甲子
 夜のぬぬ福寺
 長年と幸り
 古風は信之の
 其のつら
 其のつら
 其のつら

三つて柳あり。なつと一わたり言をときら。なほそのあつここの古言を
 わきて。かゝるの唱へ人の言のかゝるを。あつここの古言を。あつここの古言を。
 かゝる古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 へて。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 縁の且も。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 又假字。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 其のあつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 平を解。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 ほのせは。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 矢のあつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 荷田大人。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 き信。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。

仁明天皇幸甲子
 夜のぬぬ福寺
 長年と幸り
 古風は信之の
 其のつら
 其のつら
 其のつら

三つて柳あり。なつと一わたり言をときら。なほそのあつここの古言を
 わきて。かゝるの唱へ人の言のかゝるを。あつここの古言を。あつここの古言を。
 かゝる古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 へて。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 縁の且も。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 又假字。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 其のあつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 平を解。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 ほのせは。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 矢のあつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 荷田大人。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。
 き信。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。あつここの古言を。

額田姫王奉和歌
○ 獵蒲生野額田姫王歌

大海人皇子命
○ 各御歌

明日香清御原宮
○ 十市皇女
參伊勢 吹黃刀自歌

麻績王流伊良虞島時時人歌
○ 麻績王和歌

御製歌
○ 幸吉野宮御製歌

藤原宮
○ 御製歌
○ 過近江荒都柿本人麻呂歌

高市黑人近江舊堵歌
○ 幸紀伊川島皇子御歌

阿閉皇女勢之山御歌
○ 幸吉野柿本人麻呂歌

幸伊勢留京人麻呂歌
○ 當麻真人麻呂妻歌

石上大臣歌
○ 輕皇子宿安騎野柿本人麻呂歌

藤原宮役民歌
○ 遷藤原宮後志貴皇子御歌

藤原宮御井歌
○ 脫端詞歌

大寶元年太上天皇幸紀伊時歌

二年太上天皇幸多河時歌
○ 奧麻呂黑人与謝女王
長皇子 舍人娘子

三野連入唐時春日藏老哥
○ 山上憶良在唐作歌

慶雲三年幸難波時歌
○ 志貴皇子
長皇子

太上天皇幸難波宮時歌
○ 東人作者未詳
身人部王 清江娘子

太上天皇幸吉野宮時高市黑人歌

△大行天皇幸難波宮時哥

し麻呂 作者未詳
長皇子

△大行天皇幸吉野宮時哥

作者未詳

寧樂宮

○和銅元年御製歌 ○御名部皇女奉和御歌

○三年三月遷寧樂宮時御歌

○同時歌

天皇幸吉野宮時御歌
○五年四月長田王哥

○宴依紀宮時長皇子御歌

依紀宮時長皇子御歌
今この月録に後人抄のまじりてありしを
この度いづれをいづれとわきまをききてしるす

万葉集卷一之考

行幸王臣の遊宴旅のめわつて
雜歌 ぐの歌を載しかばあつて

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

大泊瀬雅武天皇、よけるは後人のいふも今な
大字に「程」の字は古に依て小字より下回

○天皇御製歌
大治食大治歌をよみてかく訓に古事記を始と例あり

○龍毛與

龍毛與、おまの春とあつたおまをいふをいへて古への助辞乃孫を名のこの

○美龍母乳

美龍母乳、おまの母乳持美、真まてをいふ辞之集中三、野野とも真然

○布久思毛與

布久思毛與、おまの田舎人の野菜

○美丈夫志持

美丈夫志持、おまの美丈夫志持

○和名物土具也加奈久之

和名物土具也加奈久之、おまの土具也加奈久之

泊瀬大和国城上郡
は天皇及よ八雄畧
と申す。
○おほいしうとて
おほいしうとて
言はてしうとて、口
づゝいふ所のま
はせよの言はれ
おほいしうとて、口
づゝいふ所のま
はせよの言はれ
おほいしうとて、口
づゝいふ所のま
はせよの言はれ
おほいしうとて、口
づゝいふ所のま
はせよの言はれ
おほいしうとて、口
づゝいふ所のま
はせよの言はれ

この四の言の
別記つてつて、決
りぬ生用之ふ又
山踏つてつて別記
はまゝくす
○右の四の言の

荷田大人 東麻の
よみ初めし
かゝり上代
のうらまを
通る玉より

大八洲を
つたひあ
よハハハハハ

コノカニの天皇言野三輪をへ幸し母も女を召し
此岳介
賤の所を言ふは
皇吉備の黒姫がもく幸し付黒ひめ大津美の菘菜を採る幸てたま方よは
る阿表那母まびんと共りつあはれあかたうつませり
家告閑
名告沙根
虚見津
山跡国者
許曾ハ物の中より取奉
告名倍手

今中を
と列ハ謀り
北月ハ假字之假
字の下言を
訓こハ知
なし

後ハ舒明天皇
と申

村山も下の
村もひく
所のたす

吾巳曾座 我許曾者
背齒告白
家字毛
名雄母
高市岡本宮御宇天白王代
天皇登香具山望国之時御制衣哥
山常庭村山有等
取與呂布天乃香具山

紀の文は記れり
一ノ別記より

○者よ五の訓を借
ては濁と嫌ハの
ハ借字のあはれ
○者ハはくく
馬き熱いとい
それとなく林
天宮の所を或は
軽ていりまき
るがとらふまか
ハ神の坐所の
齋よるんは

○作中よむの辞
二つ二つハマの
一ノ二ハ物と接
出てとていふ
まきまき

○作中よむの辞
二つ二つハマの
一ノ二ハ物と接
出てとていふ
まきまき

とくちあつていふべきあり。集の例美草とハかぬ。○も免道のまこと。○地は事時
の行宮をいふ。○紀の地時ちて。後岡本宮の時。道江の幸は。あはれ。○紀の地は事時
後岡本宮御宇天皇代
右岡天皇重て即位して二年の冬。日本の舒明天
皇。この岡本宮の地。宮づくりにて遷まされ。○後
岡本宮とせり。○今今しむもの岡とつ。
の川系宮の東山とて。昔より近き所と。

額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

○額田姫王作哥
○額田姫王作哥
○額田姫王作哥

久木盛

木盛借字にて卷七その介も冬隠春去来者...

花さきけれとまをニ... 春去來

鳴奴不聞有之花毛... 不喧有之鳥毛来

茂... 入而毛不取草深

執手母不見... 秋山乃

木葉子見而者... 黄葉子婆取而

曾思奴布... 青子者置而曾

...

...

このまごの描

山の下を補

...

大海へかの子の神

...

...

女より男と兄子

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

日本紀曰天智四年四月三位麻績王有罪流于國備一子流押豆島二子流鹿島也是云配于伊勢國伊良鹿島者若疑後人緣歌辭而誤記乎（鹿島）

今著聞集伊與此國（鹿島）一子流押豆島二子流鹿島

○天皇御製表哥

三ヨシノノ三ハ真トミガ子ニ耳借テ申言ノ者ノ也（耳借）三ヨシノノ三ハ真トミガ子ニ耳借テ申言ノ者ノ也

三吉野之（吉野）耳我嶺介（耳我嶺）耳我嶺介（耳我嶺）

三吉野之（吉野）耳我嶺介（耳我嶺）耳我嶺介（耳我嶺）

三吉野之（吉野）耳我嶺介（耳我嶺）耳我嶺介（耳我嶺）

三吉野之（吉野）耳我嶺介（耳我嶺）耳我嶺介（耳我嶺）

老の御金
の御金
の御金

間無曾雨者零計類（間無曾雨者零計類）

其雪乃時無如其雨乃間無如隈毛不落（其雪乃時無如其雨乃間無如隈毛不落）

道（道）

○天皇幸于吉野宮時御製表哥（天皇幸于吉野宮時御製表哥）

野の幸ハ穠よるゆを上の大降（野の幸ハ穠よるゆを上の大降）

大降（大降）

淑人乃（淑人乃）良跡吉見而好常言師芳野吉見與良人四來（淑人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見與良人四來）

三（三）

結（結）

結（結）

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

此大降
の御金
の御金

虚見て言多し
一本ヤソラミの冠辞。今本。天来満
の五ミヨク人々耳
満の字を借し
今本平山子越
而して下のあやれ國隔ち依
而の字を借し
一本ヤ倭子置
而の字を借し
ハ別記云ふ

今本表章之茂
生春霞立春日
之靈氣流
知と之り
一ト下
又之り
レハ

仍て
木乃
辞
弥
嗣
尔
天下
所知
食
来
食之字

虚見
倭子置
青丹吉
平山越
而

何方御念食可
可

天離
夷者
雖有
石走
辞
淡海国

乃樂浪乃
大津宮
尔
天下所知
食
天皇之神
之御

言能
大宮者
此間
等
雖聞
大殿者
此間
等
雖云

霞立春日
香霧流
其草
香
般
成
奴
留

大宮處見者
丈夫
思
母

百磯城之
辞
大宮處見者
丈夫
思
母

互哥

樂浪之
辞
思加賀乃
幸崎
雖幸
有

大宮人之
船
妹
知

魚津

尤散難
弥乃
志我
能
大和
太

昔人
二
將
會
跡
母
戸

水
之
流
之
流
之
流

おのへの御を
て
入
り
の
所

よかふ

いれりへる虚

ハたすま。もあふ。且ねをいひけり。何れや。

○越勢能山時阿閉皇女御作哥ヨシマヘル 越勢の山に紀よ奉

此也是能コレヤコノ 倭余四手者我戀流ワカコラル 京留

木路尔有云キヂニアリトフ 名余負ナニオフ 勢能山セノヤマ 下巻

○幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作哥カカ 持統天皇の御

八隅知之ヤスミシ 吾大王之所聞食ワカオホキミ 天下の事をす

者思毛ハシモ 澤二雖有サハニ 山川之ヤマカハノ 山と川と二つをいふ

御心乎ミココロヲ 吉野乃国之花散相ヨシノノクニノハナチラ ちのこを

秋津乃野邊余アキツノノノ 宮柱太敷座波ミヤハシラ 敷立了古言毛

大宮人者オホミヤビト 舟並氏フネナミ 且川渡舟競夕河渡ヤカハワタリ 競の夕

保利江乃可波乃ホリエノ 此川乃絶事奈久此山乃弥高良之コノカハノ 良

珠水激タマシ 辞瀧之タギ 宮子波ミヤコハ 宮の前島

見禮跡不飽ミレド アカヌ

子八借字子て宮コハ 所

卷五

卷五

卷五

卷五

卷五

卷五

卷五

可聞

反哥

雖見飽奴吉野乃河之常滑乃

安見知之

吾大王

神長柄

神佐備世須登

津河内尔高殿子高知座而

上立国見乎為波

絶事無久復還見年

神長柄

神佐備世須登

神佐備世須登

上立国見乎為波

上立国見乎為波

山づきのみちもちの約よて山つ持

川字立といひて

昔原長根のついで古記お天孫天降まふ

豊有

奉御調等

花挿頭持

遊副川之神母

大御食余仕奉等上瀬余鶏川乎立

下瀬余小網刺

山川母

氏奉流神乃御代鴨

神すきぎ乃流代

常滑の石よふちのり

古事記の古言

神長柄

神佐備世須登

神佐備世須登

上立国見乎為波

上立国見乎為波

セ火ニ出見命
海ノ余のし時
も海神百取机
代の物を捧て
て女と仕奉て
る。即山神
河神の仕奉も
均し。もては國
人ノ教すん教
る。道よりある
恐あまうやう。

互哥

山川毛周而奉流山川のまわらばらと奉流 神長柄多藝津河カミナガラ タギツカフ

内尔船出為加母ウチナドセカモ 山川のまわらばらと奉流 大津神よりきて、唯今船せしうのそ

幸伊勢国之時留京柿本朝臣人麻呂作哥シヤイセツクニノトキルウキヤシノハチノチノヒノノ 紀元元年二月は伊勢の昔より

五月志摩の阿胡行宮イツゴシマノアコウキョウ ありせしとてし。

嗚呼兒乃浦介ウヘエノウラニ 志摩郡の浦之行宮に在りて、まて、おこりり。

能須素介之保美都良武賀ノホスヘノタメミツラフカ 古くは、浦より安胡乃守良尔布奈能里須良年、子等女良我安可毛

船衆為良武嬖孀等之珠裳乃須十二四寶三都良武香フネムラシメタメミツラフカ 能須素介之保美都良武賀、古くは、浦より安胡乃守良尔布奈能里須良年、子等女良我安可毛

珠ハ國ニ依テ安
可ト判

女ハ多志志と語り
つんじ答のやを
去のり唱ゆめり。

過ハガとく通
へばあとのこなん
の字もよひて
おののこも
おのハ人のい
まのぞ。

可母カモ 今之、大官人之玉藻苅良武オホミヤビトノタメモカルラム 手笥乃崎介テヅツノサキニ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

劍著ケンショ 手笥乃崎介テヅツノサキニ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

潮丸為二シホマワリニ 浪乃塩丸猪島音ナミノシホマワリイノ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

五十良見乃島邊イツシラミノシマノヘ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

操船荷妹乘良六鹿荒島田子ウラフネノイモルラムカノアラキシマワラ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

浦田返廻ウラタヘマエ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

浦田返廻ウラタヘマエ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

浦田返廻ウラタヘマエ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

浦田返廻ウラタヘマエ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

浦田返廻ウラタヘマエ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

浦田返廻ウラタヘマエ 志摩郡志那郡の崎に、れ、剣を著、今毛

石根楚樹押

三雪落

草枕

古部

荒山道子

坂鳥乃朝越座而玉蜻

乃大野介旗須為寸

昔念而

反哥

阿騎乃野介

真草苜

念介

荒山道子 荒山生...

坂鳥乃朝越座而玉蜻 初瀬寺の傍...

乃大野介旗須為寸 乃大野介...

昔念而 昔念而...

反哥 今本より短...

阿騎乃野介 今本野...

真草苜 今本...

念介 今本...

黄葉過去君之

形見跡曾來師

東

野

互見為者月西渡

日雙斯

皇子命乃馬副而

御獵立師斯時者來向

黄葉過去君之 今本...

形見跡曾來師 今本...

東 今本...

野 今本...

互見為者月西渡 今本...

日雙斯 今本...

皇子命乃馬副而 今本...

御獵立師斯時者來向 今本...

まがらく天智天皇
の御時...
上の子孫...
侍て...

白心... 神皇... 他國...
國出... 新代... 神皇...
卷十四... 泉乃河介... 持越流...
真木乃都麻手乎...

百不足... 神隨余有之...
伊弉波久見者... 神隨余有之...
神隨余有之... 神隨余有之...

從明日香宮遷居藤原宮之後...
從明日香宮遷居藤原宮之後...
從明日香宮遷居藤原宮之後...
從明日香宮遷居藤原宮之後...

倭保... 京都乎遠見無用尔布父...
倭保... 京都乎遠見無用尔布父...
倭保... 京都乎遠見無用尔布父...
倭保... 京都乎遠見無用尔布父...

見... 古... 下...

八隅知之... 和期大王高照日之皇子...
八隅知之... 和期大王高照日之皇子...
八隅知之... 和期大王高照日之皇子...
八隅知之... 和期大王高照日之皇子...

日本乃... 倭... 倭...
日本乃... 倭... 倭...
日本乃... 倭... 倭...
日本乃... 倭... 倭...

山も郡の大... 清香具山者

日經乃大御門介

之美佐備立有

者 美豆ハレハ言ハ冠群

日緯能大御門介

耳為

背友乃大御門介

神佐備立有

言野乃山者 景友乃

都礼母

右三山東南北の御門

高知也天之御陰

水許曾波

日之御景乃

常介有米御井之清水

常介有米御井之清水

常介有米御井之清水

常介有米御井之清水

常介有米御井之清水

常介有米御井之清水

處女之友者

友紀ハ...

藤原之大官都加倍安禮衝哉

禮衝之...

古言の...

藤原之大官都加倍安禮衝哉

摺衣ハ古ハ中將沖遊ヤシシ旅ヨマツル

引馬野介 ニキヒヒミヤノノ 仁保布榛原 ハギハラ 入乱 イラン

良志のゆり利きんハハ ヨモニホ 衣介保波勢 セ 且 カ 且 カ 且 カ

多鼻能知師介 シニ 下 シ 下 シ 下 シ

右一首長忌寸與麻呂 オキ 麻呂 マロ 麻呂 マロ

何所介可船泊為良武 イゴコニカフチハテスラ 船の行到と古へ フネノユキ 安禮乃崎 ヤスレノサキ

撈多味行之 ウラタミヨクニ 言 コト 言 コト 言 コト

棚無小舟 タナナシコボネ 大船 オホフネ 大船 オホフネ

右一首高市連馬人 タカチノツラシ 馬人 ウマヒト 馬人 ウマヒト

譽謝女王作哥

紀ノ度雲三

流經 カヲル 流ハ借字トク長ラヤク ツク 妻吹風之 ツク 寒夜介 サムキヨ

吾勢能君者獨香宿良武 ワガセノキミハヒトリカヌラ 妻 ツク 妻 ツク 妻 ツク

長皇子御作哥

天武天皇の皇子トテ重龜元年六月薨ス

暮相而 ヨモニアヒテ 集 ツク 集 ツク 集 ツク

朝面無美 アサタオモナ 本 ホ 本 ホ 本 ホ

隱介加 カクレノカ 女 メ 女 メ 女 メ

氣長妹之 キナガイモガ 氣 キ 氣 キ 氣 キ

夜 ヨ 夜 ヨ 夜 ヨ

氣長妹之

氣長妹之

無美 ムスビ 今 イマ 今 イマ 今 イマ

夜 ヨ 夜 ヨ 夜 ヨ

ひらへまき...
ふらふら...
乃雅...
二宮...
てま...

多波和射大世 早日本邊
ひのり...
ま...
乃雅...
二宮...
てま...
待戀奴良武

○慶雲三年丙午秋九月幸于難波宮時

紀元今年...
十月還...

志貴皇子御作哥

葦邊行鴨之羽我比尔
念
はまの...
霜零而
寒暮家之所

念
はまの...
霜零而
寒暮家之所

長皇子御作哥

雪散打
安良羅松原
摩菟羅羅羅羅

住吉之和名抄
復三...
既...
い...
假...
要...
字...
え...
て...
も...
の...
記...
は...
え...

住吉之和名抄
復三...
既...
い...
假...
要...
字...
え...
て...
も...
の...
記...
は...
え...

見禮常不飽香聞
愛...
共...

見禮常不飽香聞
愛...
共...

見禮常不飽香聞
愛...
共...

大上天皇幸于難波宮時哥
は下...
美野...

大上天皇幸于難波宮時哥
は下...
美野...

ついでに...

ありかありて六年大疫二年の正月崩のひきかへと右に...

大伴乃高師能濱乃 和泉国大鳥郡よほほハ...

根子枕宿村 君之手毛未枕者...

家之所思由 松根と枕とをてぬ...

右一首置始東人 紀上置條...

旅尔之而物戀之伎乃 鳴事毛不所聞有世者孤悲而死

萬思 目録よありて...

右作者未詳

大伴乃美津能濱尔有亡心貝 家尔有妹子亡心而

念哉 此類の辞の...

右一首身人部王 天平元年正月...

草枕辞 客去君跡知麻世婆...

岸之埴布尔仁寶播散麻思乎 丹土花...

丹土の埴と云ふ...

右一首清江娘子進長皇子 上の春日娘女...

太上天皇幸于吉野宮時高市連黑人作哥

倭尔者鳴而欣来良武 呼兒鳥象乃中山...

紀天皇元八年 月吉跡の幸の...

後元明天皇

申 伊勢大神宮式部
以鹿皮縫之胡粉
塗以墨畫之
あまのまへも半ま
すゝしや華せか
ひん

或人犬嘗祭の節乃
神に祈るんといふ
嘗に神祈りあり
り射神の音
うらやまハ神
こころをそへま
つゝまを

うらの使と連され
んむ周ハ大おま
てその軍ハたりが
うらやまハ三月
はませし

○和銅元年戊申冬十一月天皇御製哥

天津御代豊國成姫天皇

丈夫之鞆乃音為奈利

鞆は左臂に著て杖をたどり弦を過る物を弦の音
音は形部部秘訓抄にも著る振苦き音なり
物部

乃大臣 楯立良思母

乃大臣は清軍の大将
楯立良思母は清軍の調練する所なり
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に

ぬれはうの使を遣はるその清軍は
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に

陸奥越後の蝦夷の及ぶ和銅二年三月遠江駿河越前越中
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に

御名部皇女奉和御哥

御名部皇女奉和御哥
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に

吾大王物莫御念須賣神乃嗣而賜流

天の皇祖神より嗣を依
賜へる天の皇祖神より

吾莫 吾莫 吾莫

吾莫 吾莫 吾莫

わが大王物莫御念須賣神乃嗣而賜流
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に

○和銅三年庚戌春三月從藤原宮遷于寧樂宮時

今春二月とあれし
紀より三月

御輿停長屋原

和名抄ふ山通都
長屋原

回望故郷御作哥

御作哥は
乃大臣は清軍の時々の越後の蝦夷に

うらやみのせしむる一書よ天上天
とて何れも今時上におりまゝ

飛鳥トトリ 明日香能里アスカノ 子置而伊奈波安君之當者不所見香聞安良

武ム 一本君之當乎不見而香毛安良年。藤原の都ありて是もこの里とてものなる

○從藤原宮遷寧樂宮時ウツリマス ○作哥ウタ 今なほもと或本哥とて

けなむ文としてわさるやせしむる。はたしこの某の本文よ載るるなほ

天皇乃御命畏美ミヤノミコトヲオそ 上代より天皇御命を畏むるは神の道なるをいふ言

家毛放イハフセサカ 今本家毛釋とて

泊瀬乃川余舩浮而ハッセノカハニウケテ 今本家毛釋とて

吾行河乃川隈之八十阿不落萬段顧為作ワカガハノカハニノヤチアヲ

玉梓乃道行晚タマシロノミチユキ 今本家毛釋とて

乃京師乃依保川余伊去到而ノミヤコノヨシホカハニユキ

我宿有床之上從ワカシタルノトノカハニヨリ

朝月夜アサツクヨ 朝アサ 月ツキ 夜ヨ 清尔見者梓乃穂尔サヤニミ

夜之霜落ヨノシモフリ 夜ヨ 之ノ 霜シモ 落フリ

息言無久通イハコトナク 息イハ 言コト 無ナク 久ナク 通トク

作寂尔千代二年爾座年公與サトケルチヨニニイサキニト

天皇乃御命畏美
上代より天皇御命を畏むるは神の道なるをいふ言

仁德天皇紀
茂壞以不昔月風雨
今本家毛釋とて

仁德天皇紀
茂壞以不昔月風雨
今本家毛釋とて

今幸この所ノ事
御言とるハハ
るのハト云々

花十八公と云々の
は猪心と云々の
こと大まかハ
又云々

ハモヤケてもさうんこの立田山のさハ
のほよと云々又別ノ御言のさう
ハモヤケてもさうんこの立田山のさハ

○長皇子與志貴皇子宴於依紀宮時長皇子御作哥
ハカシトシキニカキニヒコノミエラウタノハ
ハモヤケてもさうんこの立田山のさハ

春日ナハ依紀宮ノ山ノ月ノ如クも依紀宮ノ山ノ月ノ如ク
依紀宮ノ山ノ月ノ如クも依紀宮ノ山ノ月ノ如ク

秋去者今毛見如
アキサレバイモモニルゴト
妻戀小鹿將鳴山曾

高野原之宇倍
タカノハラノウベ
今も又さうなるとの奥に

且くは依紀宮
今も又さうなるとの奥に

万葉集卷一之考終



